エッセイ特集1

聖人伝と暴露文書の間で——ヴィクトリア時代の〈伝記〉

19世紀の伝記について

草光 俊雄

1837年、ヴィクトリア (Victoria) が若干18歳で即位し、64年にわたる長いヴィクトリア朝が始まったその年に、J. G. ロックハート (Lockhart) の『サー・ウォルター・スコット伝』(*The Life of Sir Walter Scott*) の出版が始まった。イギリス人の多くが伝記文学の筆頭にあげるのはジェイムズ・ボズウェル (James Boswell) の『サミュエル・ジョンソン博士伝』(*The Life of Samuel Johnson, LL.D.*) であるが、ロックハートの『スコット伝』はボズウェルに次ぐ業績であると言われることが多い。1911年版『ブリタニカ百科事典』(*Encyclopaedia Britannica*) に多くの小伝を寄稿し、かつ「伝記」の項目を執筆したエドモンド・ゴス (Edmund Gosse) は、ボズウェルの『ジョンソン伝』を第一級の伝記として賞賛した後、伝記とはかくあるべきという模範を示したと評価し、数ある19世紀初期の伝記でその影響を正しく受け継いだのがロックハートであると言っている。またサー・ハロルド・ニコルソン (Sir Harold Nicolson) は1928年に『イギリスの伝記の進展』(*The Development of English Biography*) において、やはりロックハートの伝記をボズウェルに次ぐものとして伝記文学の傑作であるとした。

さて、わたしがここで論じたいのはロックハートの『スコット伝』を分析することでも、またそれがヴィクトリア朝の代表的な伝記である、ということをも主張することでもない。正直に言えば、ロックハートの作品はエヴリマンの縮小版に目を通しただけであるのでそのような資格はわたしにはない。『スコット伝』を、若く美しい女王の元で始まったヴィクトリア朝にふさわしい伝記文学の発行であったと評するのか、それとも、ロックハートは例外というか、前の世代、18世紀にむしろ属しているかのように扱

うのか、ヴィクトリア朝の専門家は迷うのではないか。そしてやはり19世紀、ヴィクトリア朝の伝記文学の最高傑作の一つと謂われるJ. A. フルード(Froude)の『トマス・カーライル伝』(*Thomas Carlyle, 1882-84*)と、彼が編纂したカーライルの妻ジェイン・ウェルッシュ・カーライルの『書簡と想い出』(*Letters and Memorials of Jane Welsh Carlyle, 1883*)は、むしろヴィクトリア朝以後の精神分析を採り入れた伝記文学の嚆矢として(フルードの意図はともかくとして)、ヴィクトリア朝の例外的作品として扱われているのを考えると、ヴィクトリア朝には語るに足る伝記文学が存在したのかと疑わしくなってくる。実際19世紀に書かれた伝記は、20世紀以降にはその存在自体貶められて語られるのが普通のようなのである。通常のヴィクトリア朝の伝記はただ分厚くて、伝記で語られる人物への敬意に満ちた、読んでいても全くつまらない、まるで中世に流行った「聖人伝」(hagiography)のようなものが横行していたとするヴィクトリア朝伝記観が横行しているのである。そうした視点はゴスにしてもニコルソンにしても同様である。

多くの場合二巻本の『だれその人と時代』、『だれその仕事と時代』といったタイトルの伝記が山のように量産された、というのがヴィクトリア時代を過ごした若者たちの辟易した感想だった、というのが20世紀初期の作家たち、とくにブルームズベリ・グループの人たちの意見であり、それが今日まで大きな影響を及ぼしているように思える。そうした作品を「聖人伝」になぞらえてヴィクトリア朝の否定に進んだのが彼らであり、ゴスにしても、ニコルソンにしてもブルームズベリとは即かず離れずだし、リットン・ストレイチー(Lytton Strachey)の『ヴィクトリア朝偉人伝』(*Eminent Victorians*)を紐解けば、彼らの反ヴィクトリア朝の拠って立つ根拠がさらに理解できるというものだろう。一方、ブルームズベリにとってのヴィクトリア朝の伝記は、ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)の父親レスリー・ステイブン(Lesley Stephen)がその発行と編纂に関わった『国民伝記事典』(*The Dictionary of National Biography*)であり、普通われわれがDNBと呼び、今日では新しいオックスフォード大学出版局によるODNBとして知られている事典の元祖がまさにヴィクトリア朝に(1885年)刊行され始めたということの方が重要であつたろうと思われる。

19世紀のイギリスではDNBの他にも1856年に「国立肖像画美術館」(The National Portrait Gallery)が設立されている。伝記とよく比較されるのが肖像画であることはいまでもない、それは「国立美術館」(The National Gallery)の開館から30年近く経ってからのことである。その他、州(カウンティー)ごとの歴史を集大成しようとするいまだに継続中の『ヴィクトリア・カウンティー・ヒストリー』(*The Victoria County History*)が始まったのが1899年から、さらに英語、すなわちイギリス人にとっての国語の語源にまで遡った包括的な辞書である『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*)の編纂は1857年に始まっている。つまりイギリスの国民的な関心を示すさまざまな行事がまさにヴィクトリア朝に始まっており、それはイギリス帝国の発展と軌を一にしていることを絶えず自覚的に考えながら、その善し悪しは別にして、それに違和感を感じる人びとが出てきたことが伝記に関する言説にも影響を与えているのではないかと思われるのだ。

たとえば宗教について考えてみると、ゴスの『父と子』(*Father and Son*, 1907)においても、ストレイチャーの『ヴィクトリア朝偉人伝』のトマス・アーノルド(Thomas Arnold)についての章が特にそう思われるが、ヴィクトリア朝という宗教に否定的、懐疑的な時代に抵抗し、自分の信じるキリスト教にのめりこむように生きようとした、20世紀以降の人間から見れば反時代的で時代遅れの人びとの存在と、その時代に勢いを取り戻したかのような「聖人伝」的な伝記の隆盛とがオーバーラップされて見えてくるのは、ポストヴィクトリア朝の文人たちには当たり前のことだったのかもしれない。科学者であったゴスの父親が、ダーウィン(Charles Darwin)の進化論を自らの信仰のために否定することに至る過程を語る息子の胸の張り裂けんばかりの気持ちを後世の人間は読まされることになる。そしてかたくなな信仰のもとらす悲劇を痛感するのだが、科学と信仰がまた別のかたちで共存することを学んだ後の人間は、ゴスの父親に対して痛切な共感を同時に感じてしまうことは避けられない。

ヴィクトリア時代にいわゆる科学的な歴史学と文学的な歴史学との間に明確な境界線が引かれたと考えるのは簡単すぎるかもしれないが、たし

かに19世紀も後半になって、大学の文学部、史学部に籍を置き、歴史学の科学としての成立を主張する人たちが出てきたことは疑いの余地はない。たとえば19世紀の前半に絶大な影響力を持っていたT. B. マコーリー(Macaulay)やカーライルのような歴史家を批判し、ドイツの歴史家レオポルド・フォン・ランケ(Leopold von Ranke)の影響を受けたジョン・ロバート・シーリー(John Robert Seeley)やJ. B. ベリ(Bury)のような歴史家たちが大学で大きな影響力を持ち始めたのである。彼らは二人ともケンブリッジの歴史学の教授だった。こうした流れの中から、伝記をピュアな文学と捉える人と、いや歴史であると考えた人が出てくる。歴史自体が文学か科学かと問われる一方、伝記は文学か歴史かと問われるようになる。この問題をもっとも自覚的に考えた一人がヴァージニア・ウルフであったと思われるが、ここではウルフにまで深入りすることはできないので、とりあえずそういう問題があった、と指摘しておくだけに、そこから派生してきたと思われる伝記の執筆にまつわる問題について考えてみたい。

さきにフルードによるカーライル夫妻についての伝記と書簡集について述べたが、「チェルシーの賢人」として同時代の人びとに敬愛されていた歴史家の私生活を暴露することへの反感は大きなものがあつた。その前にロックハートの『スコット伝』に対してもカーライルは一方でこの作品を高く評価しながらもスコットの私的なことが公になることに批判的であつた。伝記は対象とする人物の「人間」をどこまで明らかにするべきなのか、文学の抱えるひとつの大きな問題が19世紀に生まれたといっても良いだろう。探偵のように、あるいは歴史家のようにと言って良いかもしれないが、主人公の私的な身辺を根掘り葉掘り明らかにしたいという伝記作家からの欲望が強くなると、自分が伝記の対象になるかもしれないという怖れも当然出てくる。ヘンリー・ジェイムズ(Henry James)が伝記作家からのいわれない身辺への探索から逃れるために自分に関する直接の資料の多くを破棄したことはよく知られているが、彼はまた自らの作品『アスパンの恋文』(*The Aspern Papers*, 1888)において、ヴェネチアを舞台にしながら、アスパンの恋文を元愛人から手に入れようとする伝記作家の信じられないほどの執拗な試みを知った元愛人が作家に対して「この出版屋の悪党め」(Your publishing scoundrels!)と怒鳴りつける場面があるが、読んでいて思わず

背筋が寒くなる場所であった。

わたしがイギリスへ留学している頃から、大変優れたヴィクトリア朝の人たちの伝記が出版されるようになった。文学の分野ではロマン派の解釈を大きく変えることになったリチャード・ホームズ (Richard Holmes) の P. B. シェリー (Shelley) や S. T. コールリッジ (Coleridge) の伝記をはじめ、彼のより自伝的な側面を一種の伝記を書くという行為と結びつけた傑作『足跡』 (*The Footsteps: Adventures of Romantic Biographer*) はわたしたちに伝記とはなにかと問いかけてくる。また主としてアイルランド出身の文学者、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde)、W. B. イェイツ (Yeats)、ジェームズ・ジョイス (James Joyce) のそれぞれ浩瀚な伝記を書いたりリチャード・エルマン (Richard Ellmann)、ウィリアム・モリス (William Morris) やエドワード・バーン＝ジョーンズ (Edward Burne-Jones) の伝記の作者フィオナ・マッカーシー (Fiona McCarthy)、政治の分野ではウィリアム・グラッドストーン (William Gladstone) の日記を編纂し伝記を書いた、『オックスフォード国民伝記事典』の初代の編集長だったコリン・マシュー (Colin Matthew) の業績など、今ここで思いつくまま挙げてみても実に多くの大変質の高い伝記が次々に出版されている。これらの伝記はボズウェルやロックハートが開拓した、書簡や日記、知人たちの証言 (これも多くは書簡に日記) を丹念に集め、当時の時代を新聞やさまざまな資料を用いて明らかにし、伝記の主人公の魅力を伝えながら決して「聖人伝」に墮すことなく、十分に読み応えのある作品である。お蔭でわれわれのヴィクトリア朝の理解が随分と深められることになったと考えるのはわたしだけではないだろう。また伝記的な要素を採り入れながら、フィクションを巧みに挿入した作品、例えばピーター・アクロイド (Peter Ackroyd) によるチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) についてのものなど、才能ある作家や伝記作家による、とくにヴィクトリア朝を舞台にした想像力豊かな伝記とも物語ともとれる世界が描かれるようになってきており、この時代の理解がただ歴史を読むだけでは得られない深さと豊かさをもたらしてくれている。ヴィクトリア朝についてのものではないが、わたしが最近読んで大変感銘を受けたものに、ルース・スカー (Ruth Scurr) による17世紀の伝記作家・古事物研究家のジョン・オーブリー (John Aubrey) についての歴史書とも創作ともとれ

る、彼が書いた自伝という体裁をとった『ジョン・オーブリー——自伝』(*John Aubrey: My Own Life*)がある。オーブリーをめぐって徹底的に歴史的に研究し(スカーは歴史家、それも以前の作品はフランス史が専門でロベスピエール(M. Robespierre)についての本を書いている人である)、そこへなるほどと十分に納得できる想像力を働かせてオーブリーが書かなかった自伝を書き上げ、あろうことか、伝記を対象としたある文学賞の最終候補にまでなったのである。これまで通りの伝記は今後も書かれるだろうが、その人物の実際の言動が分からないことが多いだけに、われわれはいろいろな想像をたくましくしながら、ある歴史上の人物の伝記を紐解くことになる。しかしこれからは才能ある伝記作家の想像を踏まえた人物像に寄り添うようなかたちでその人のことを考えることになることが多くなるかもしれない。ヴィクトリア朝にはそうした魅力、あるいは挑発が多く潜んでいるのではないだろうか。

——東京大学名誉教授